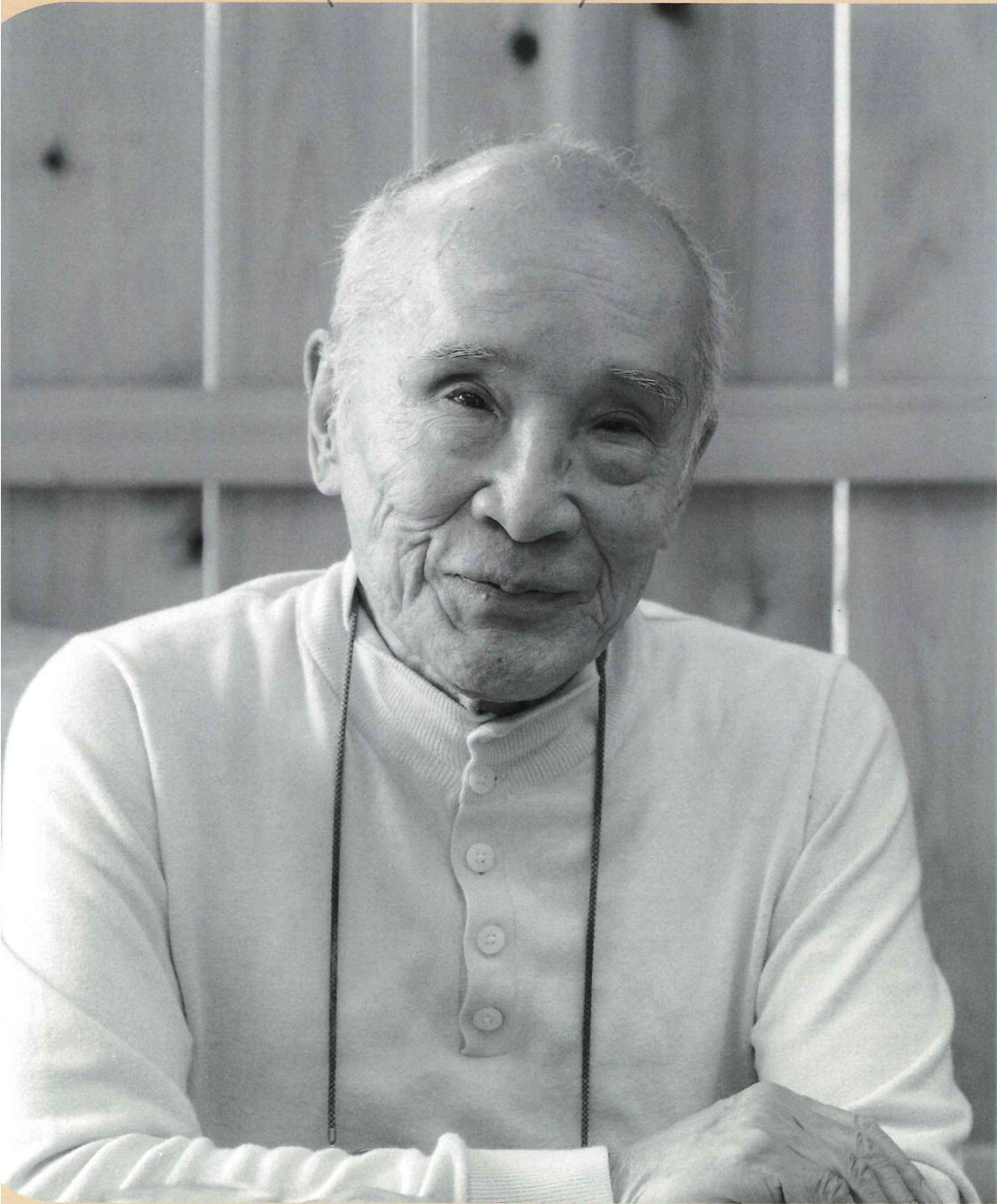


「はるかな国」から来た詩人

たにかわしゅんたろう

谷川俊太郎

昭和6年～



● 一九三二(昭和六年) 十二月十五日、東京信濃町の慶應病院で哲学者の父徹三・母多喜子のひとり子として生まれる。北軽井沢の父の別荘の近隣には野上弥生子、岸田國士らの別荘もあった。

● 一九三八(昭和十三年) 七歳 杉並第二小学校に入学。ひとりで機械工作をするのが好きで、音楽学校出身の母からときどきピアノをならった。

● 一九四四(昭和十九年) 十三歳 府立第十三中学校(現・都立豊多摩高等学校) 入学。

● 一九四五(昭和二十年) 十四歳 七月、京都府の母方の祖父の屋敷に母と疎開。

● 一九四六(昭和二十一年) 十五歳 三月、焼け残った東京・杉並の家に帰る。京都府立桃山中学校から豊多摩中学校に復学。

● 一九四八(昭和二十三年) 十七歳 友人の北川幸比古(のちに児童文学者)らの影響で詩作をはじめ、校友会誌「豊多摩」に「青蛙」他三編を発表。

● 一九五〇(昭和二十五年) 十九歳 教師に反抗し、定時制に転学して卒業。進学する意志はうしなっていた。父にわたしたノートに詩を三好達治が認め、十二月、「文藝界」に「ネロ他五篇」が掲載される。

● 一九五二(昭和二十七年) 二十一歳 六月、第一詩集『二十億光年の孤独』(創元社) 刊行。

● 一九五三(昭和二十八年) 二十二歳 七月、川崎洋、茨木のり子らの詩誌「権」の同人になる。

● 一九五四(昭和二十九年) 二十三歳 十月、岸田國士の長女、岸田衿子と結婚。

● 一九五六(昭和三十一年) 二十五歳 十月、岸田衿子と離婚。

● 一九五七(昭和三十三年) 二十六歳 九月、初のエッセイ集『愛のバンセ』(美業之日本社) 刊行。俳優・大久保知子と結婚。六〇年に長男賢作、六三年に長女志野誕生。

● 一九六五(昭和四十一年) 三十四歳 十二月、童話『げんはへつちやら』(あかね書房) 刊行。

● 一九七二(昭和四十七年) 四十二歳 二月、初の創作絵本『こっぷ』(今村昌昭写真、福音館書店) 刊行。

● 一九七三(昭和四十八年) 四十二歳 十月、「ことばあそびうた」(瀬川康男絵、福音館書店) 刊行。

● 一九七五(昭和五十年) 四十四歳 九月、『定義』(思潮社)、『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』(青土社)の二冊の詩集を刊行。

● 一九八八(昭和六十二年) 五十七歳 一月、『いちねんせい』(和田誠絵、小学館)、七月、『はだか』(佐野洋子絵、筑摩書房) 刊行。

● 一九八九(昭和六十四年) 五十八歳 十月、知子と離婚。

● 一九九〇(昭和六十五年) 五十九歳 五月、佐野洋子と結婚。

● 一九九三(平成五年) 六十二歳 五月、『世間シラズ』(思潮社) 刊行。

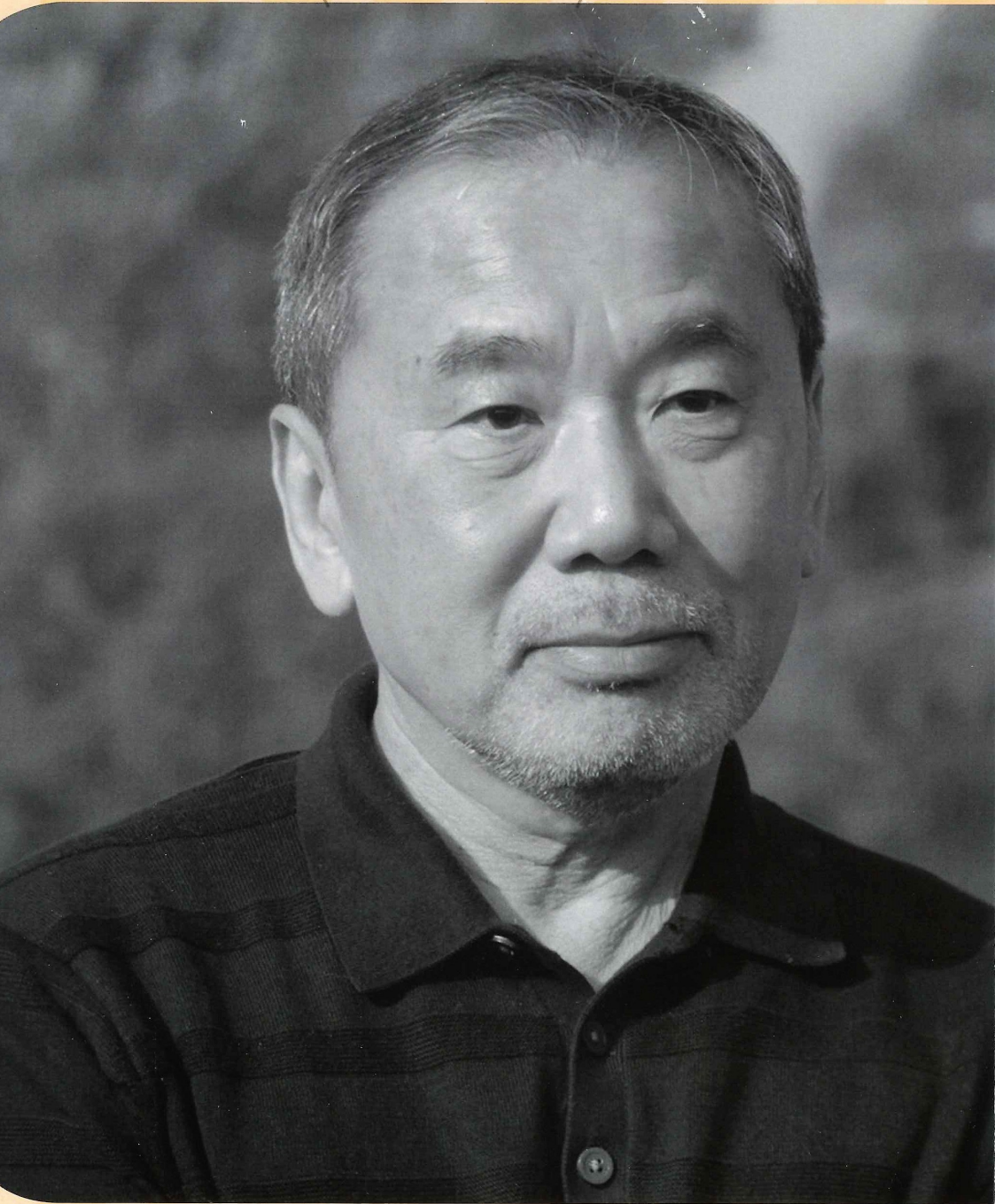
● 一九九六(平成八年) 六十五歳 七月、佐野洋子と離婚。

* 谷川俊太郎詩集『さよならは仮のことば』(新潮文庫)の「年譜」などをもとに作成した。

むらかみはるき

村上春樹

昭和24年～



- 一九四九(昭和二十四)年 一月十二日、京都市に生まれる。
- 一九六八(昭和四十三)年 十九歳、早稲田大学第一文学部に入学。
- 一九七四(昭和四十九)年 二十五歳、東京国分寺にジャズ喫茶「ピーター・キャット」を開店。
- 一九七五(昭和五十)年 二十六歳、七年かけて早稲田大学第一文学部演劇専攻を卒業。
- 一九七九(昭和五十四)年 三十歳、六月、「風の歌を聴け」が群像新人文学賞を受賞し、「群像」に掲載される。七月、講談社刊。芥川賞と野間文芸新人賞の候補となる。
- 一九八〇(昭和五十五)年 三十一歳、三月、「1973年のピンボール」を『群像』に発表。六月、講談社刊。芥川賞と野間文芸新人賞の候補となる。
- 一九八二(昭和五十七)年 三十三歳、八月、「羊をめぐる冒険」を『群像』に発表。十月、講談社刊。第四回野間文芸新人賞を受賞。
- 一九八五(昭和六十)年 三十六歳、一月、「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」新潮社刊。谷崎潤一郎賞を受賞。
- 一九八七(昭和六十二)年 三十八歳、九月、「アルウェイの森」講談社刊。ベストセラーになる。
- 一九八八(昭和六十三)年 三十九歳、十月、『ダンス・ダンス・ダンス』講談社刊。
- 一九九一(平成三)年 四十二歳、米国のプリンストン大学の客員研究員となる。翌年、客員教授、翌々年、タフツ大学に移る。
- 一九九四(平成六)年 四十五歳、四月、「ねじまき鳥クロニクル」第一部と二部、新潮社刊。第三部は九五年八月刊。九六年に読売文学賞を受賞。
- 一九九五(平成七)年 四十六歳、一月に阪神淡路大震災、三月に地下鉄サリン事件が起こる。五月、米国滞在を終え帰国。
- 一九九七(平成九)年 四十八歳、三月、「アンダーグラウンド」講談社刊。
- 二〇〇〇(平成十二)年 五十一歳、二月、「神の子どもたちはみな踊る」新潮社刊。
- 二〇〇二(平成十四)年 五十三歳、九月、「海辺のカフカ」新潮社刊。
- 二〇〇三(平成十五)年 五十四歳、四月、翻訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(サリンジャー著)白水社刊。
- 二〇〇五(平成十七)年 五十六歳、九月、「東京奇譚集」新潮社刊。
- 二〇〇六(平成十八)年 五十七歳、十一月、翻訳『グレート・ギヤツピー』(フィッツジェラルド著)中央公論新社刊。フランツ・カフカ賞、フランク・オコナー国際短編賞、世界幻想文学大賞を受賞。
- 二〇〇九(平成二十)年 六十歳、五月、『1Q84』BOOK1,2新潮社刊。毎日出版文化賞受賞。BOOK3は翌年四月刊。エルサレム賞受賞。
- 二〇一七(平成二十九)年 六十八歳、二月、『騎士団長殺し』新潮社刊。

作品解説

『1Q84』は、BOOK1とBOOK2が二〇〇九年五月に、BOOK3が二〇一〇年四月に、新潮社から刊行された。三冊の長編小説で、文庫本では六冊になっている。

作品世界は、1984年から「1Q84年」にポイントが切り替わった東京で、小説の新人賞の話や、ドメスティック・バイオレンスとその救済、カルト教団の犯罪宗教信者の親子の問題など多くの話題や主題が絡み合っている。そこを貫いているのが、少女青豆が川奈天吾の左手を握った十歳のときの記憶である。級友にからかわれた青豆を天吾がかばったことはあったが、二人は親しかったわけではない。話もしなかった。それから二十年が経つ。

今はもう三十歳になろうとしている。小学校四年生のときに、誰もいない教室で少女は少年に近づき、その手を強く握った。少年の目を下から見つめて、しばらくそうして、少女は身を翻して立ち去った。少女は転校し、以来二人は会っていない。なのに二人はそれぞれにそのときのことを忘れていない。相手は忘れているだろうと思いがら、互いにそのときのことをときどき思い出す。

——こんなことが本当にあるのだろうか。小説だからというのではなく、現実。——ある、と思う。いろいろな経験を積んだ者として、あるはずだと思っ。

ふつうは、それでもこの二人が再会することはまずない。しかし1Q84の世界では、さまざまな出来事が絡み合っていて、二人は出会うのである。少しずつ接近していき

そしてあるときその少女は天吾の手を握った。よく晴れた十二月初めの午後だった。窓の外には高い空と、白いまっすくな雲が見えた。放課後の掃除が終わったあとの教室で、天吾と彼女はたまたま二人きりになっていた。ほかには誰もいなかった。彼女は何かを決断したように足早に教室を横切り、天吾のところへやってきて、隣りに立った。そして躊躇することなく天吾の手を握った。そしてじつと彼の顔を見上げた(天吾の方が十センチばかり身長が高かった)。天吾も驚いて彼女の顔を見た。二人の目が合った。天吾は相手の瞳の中に、これまで見たこともないような透명한深みを見ることができた。その少女は長いあいだ無言のまま彼の手を握りしめていた。とても強く、一瞬も力を緩めることなく。それから彼女はさっと手を放し、スカートの裾を翻し、小走りに教室から出ていった。

天吾はわけのわからないまま、言葉を失ってしばらくそこに立ちすくんでいた。彼が最初に思ったのは、そんなところを誰かに見られなくてよかったということだった。もし誰かに見られたら、どんな騒ぎが持ち上がるか見当もつかない。彼はあたりを見まわし、ま

『1Q84』より

一日中音楽を聴いていた

村上春樹の作品には、夥しい音楽が出てくる。ジャズ、クラシック、ロック、ポップスなどで、作者が音楽好きなのはすぐに分かる。「1Q84」の冒頭では、チェコの作曲家ヤナーチェクの「シンフォニエッタ」が、青豆の乗っているタクシーに流れる。1926年の短い交響曲で、洗練された曲である。

学生時代にジャズ喫茶ピーター・キャットを開いたのも、一日中好きな音楽を聴いていたという動機からだった。

2021年に「早稲田大学国際文学館 村上春樹ライブラリー」が開館したのは、村上が自分の本や資料を早稲田大学に寄託、寄贈したからである。その中にはLPレコードやCDのコレクションも含まれていて、館内で聴くことができる。LPのジャケット裏には、「Peter Cat」のスタンプが押されているものもある。「シンフォニエッタ」は「1Q84」の天吾も聴いている。村上春樹の小説を読むと、その音楽が聴きたくなる。



本文は、『1Q84』BOOK1(新潮社)によった。

『1Q84』は新潮文庫『1Q84』全6巻で読むことができる。